

里地ネットワーク（と地元学）

竹田純一（里地ネットワーク）

【里地里山のフィールド特性】

フィールドは、海でも、川でもなく、里地・里山です。里地里山はどこかという、奥山ではなく、都市でもない、その中間にある農林漁業を行ってきた場所です。

例えば、佐渡でトキの野生復帰（環境省）を行ったり、神奈川県で里山づくり（環境省、神奈川県）を行ったり、福井県越前市でアベサンショウウオの保護活動（福井県、越前市）を行うなど、全国各地で、さまざまな保全・再生活動に関わる取り組みを行っています。

その仕組みの核となる骨組みは、人と人との共生とは何かを問うことです。人の生き方、里地里山での暮らしのあり様や、人と自然との関わり方を問い直す作業です。

活動フィールドは常に、私有地、農地や民有林です。このことは、行政が、主導的に事業を行なう公共政策であっても、私有地上での活動ですので、地権者の意図が、政策の方向に合っていないければ、何も行えないというのが里地里山の現状です。

したがって里地里山での、もっとも効果的な自然再生活動は、農家、林家、地権者自身が、自然との関わり方を、生態系に配慮した形に変えていってもらうことです。

【地元を見つめ直す地元学の重要性】

あなたの住んでいる地域は、どんな地域ですか？

あなたの足元、あなたの住まいの周囲には何がありますか？ あなたの家の水は、どこから来て、どこへ流れてゆきますか？ あなたの田んぼや水路、雑木林には、生き物がたくさんいますか？ 住民自身が、足下から、そして、自分の家の水源から、集落を見直してもらう作業を、里地ネットワークでは行っています。

対象地域の範囲は、ひとつの集水域です。その集水域が、集落であれば、非常にわかりやすい範囲となります。もっと広くとらえれば、その集水域は、河口を原点として、そこに水が集まってくる範囲です。もっとも小さくすれば、小さな沢の集水域です。その範囲の中の、人々の暮らし、地形や風土、生き物、道具、文化などを調べてゆきます。調べる際に、住民全員と地域外の異なる文化をもった人が、一緒に、地域の見直し作業を行うことで、日常的な見ている地域の特性が、外部者によって、際だち、光が当たり、宝物や資源として認識されるようになります。

【生物多様性の観点】

生物多様性への関心が低い場合は、子どもたちや、孫が遊べる環境を例にとると、結果的に、生物多様性を考えることと同じ結論を導くことができます。同時に、身近にある衣食住、農作物、民家、道具、狩猟採集の方法とか、山菜、燃料、薪の活用方法などを意識してもらうことで、暮らしのありようと生物多様性との関係を意識してもらうことができます。

大切なのは、戦前であれば、当たり前だった地域の中での循環のしくみや、自然と調和していた暮らしが、今、

どうなっているかを調べることです。

【住民全員で調べると暗黙の合意形成が完了します】

人によって、情報のアンバランスが生じています。地域の情報を、一旦全部、そこに住んでいる人たち全員で共有することが、何よりも大事です。里地ネットワークでは、集水域の全部確認すること、飲み水、井戸の位置を確認すること、村の今までの生活とか、生業、産品、何がとれるのか、どこで遊んでいたとか、どんな結いがあるのか、1年間の農事カレンダー、集落行事はどうなっているかなど、その一部を調べてゆきます。

【地域資源マップと資源カード】

このような地域資源調査を通じて、地図をつくり、先人たちの知恵をカードに聞き書きする作業を行います。この過程を通じて、地域の中の人々が地域の内発的な意思を持ってきます。つまり、地域の人たちの内発的な意思に基づいた内発的なビジョンが完成します。

このような作業を「地元学」と言っています。地元学自体は目的を持った事業を遂行するための手法ではありません。さまざまな人がかかわって、さまざまなアイデアが出て、そのさまざまなアイデアの広がりを事業化していくことによって、その1つの地域を地域住民の自発に基づいて事業を進められてゆきます。

【持続可能社会 第三のシナリオへのステップ】

外発的な刺激で、何らかの活動が起こると。活動はステップアップします。ただし、そこに住んでいる人全員の参加するようなくみがないと、地域全体には広がりません。地域社会の見直しをかけて、その地域社会の中で、自発的な再生活動を行ってもらう取り組み方法で地域社会、コミュニティーの再生が必要です。

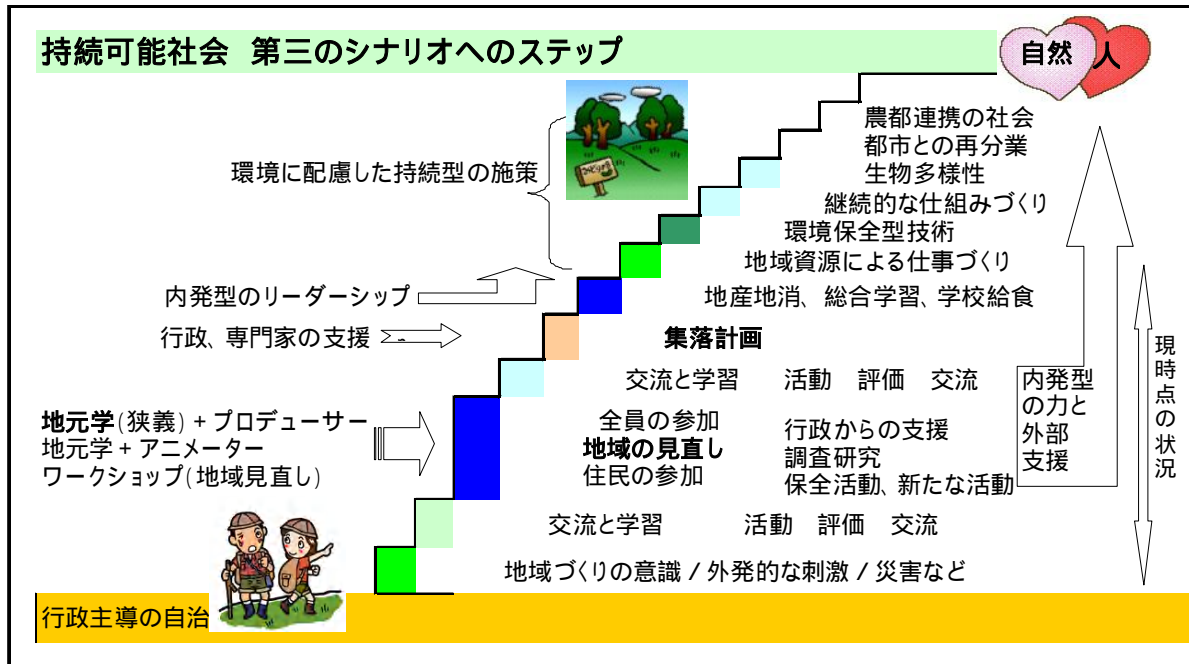
【ポイント】 長老たちが考えている方向と今、国が、いろいろな機関が考えている再生って、スタンスは同じだと思います。

【ポイント】過去の因習や封建的な構造を固守しようとする地域、政治のあり方は封建的な地域は、なかなか、地元学になじみません。しかし、地元学で壊す必要もあるかもしれません。

【ポイント】どこの段階をその地域が目指すかは、例えば14あれば14通りで全部違います。地域によって、そこにある風土が違うのと同様に、住民(主人公)が違い、関係する人、交流する人も違います。自然再生の仕上げは、そこに残る地域リーダーに対するサポートです。そのサポートのシナリオや手法は既にあると思います。ニーズは確実にある。今は、先進的なモデルを作りきること、そうすれば、行政側の支援も助成財団の支援も、大学の支援もあると思います。

里地ネットワーク（と地元学）

Network for Sustainable Rural Communities (and Regional Study)



コンセプトシート

地元学とは地域を見直す手法

[特徴]

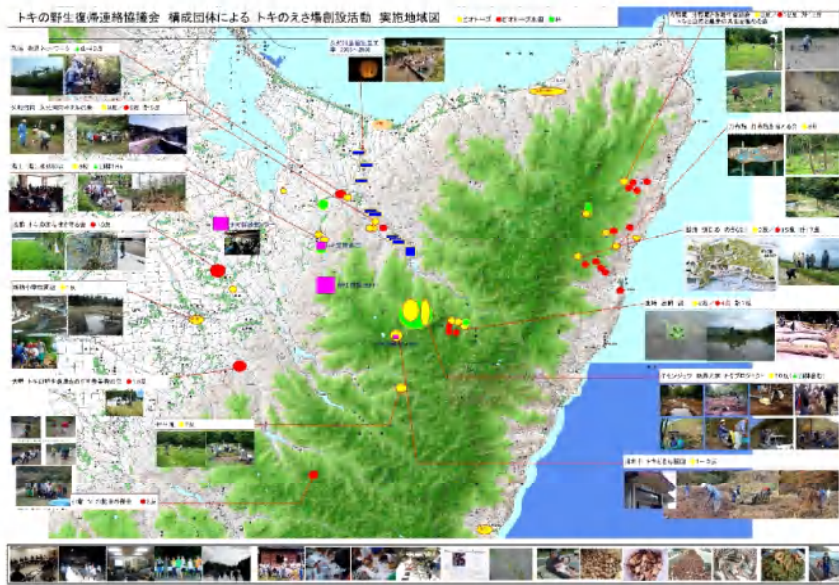
- 住民主体の地域づくり
- 目的を持たない

コミュニケーションを活性化させる

目的のない「地元学」

従来は住民参加の場合、すでに決まっている事業や目的に向かって、住民参加の行動になる。

地元学の場合、どこに発展していくかわからない、一つの目的ができるわけではない。



地元のあるものさがし



まとめよう！



地元マップをつくろう

活動の目指すもの

日本国内において、持続可能社会づくり、里地里山における共生と循環の地域社会づくりを実践する産官学市民・農林水産従事者のネットワーク。
リーダーの発掘と育成、研修、学習体系の構築、集落文化の見直し、産品開発、ビジョン作成、環境保全型まちづくり、生物多様性保全など、住民自身による総合的な集落自治の活性化をめざした活動を実践している。

活動場所について

日本国内を対象に、以下の事業をパイロット事業と位置づけ、関連事業の実施を通じて全国への普及啓発を図っている。

- ・トキの野生復帰をめざした共生と循環の地域社会づくり(佐渡:環境省)
- ・人と自然が織りなす里地環境づくり(全国30拠点:農水省、環境省)
- ・里地里山づくり(神奈川県城山町、秦野市:神奈川県)
- ・市民主導型自然再生に関する検討会(里地地域10地区:環境省)
- ・環境保全型ローテク技術調査(全国100事例調査:環境省)
- ・里地里山保全再生モデル事業(秦野市、越前市、氷川市:環境省)
- ・アバサンショウオの保全と地域社会づくり(越前市:福井県庁)
- ・日本の里地里山30保全活用コンテスト事務局(読売新聞、環境省)
- ・廃棄物リサイクル対策事例調査(全国100地域調査:環境省)
- ・建築再生技術集(全国100事例調査:早稲田大学)

活動期間、頻度について

1998年2月17日 里地ネットワークを設立。以降、常勤事務局を設置。
全国各地に会員を有し、地域リーダーを対象に、現地活動を支援。
東京事務局は、パイロット事業を遂行。

関係者について

環境基本計画(2000)では、「里地自然地域」は、循環、共生、参加が可能な場であり、持続可能社会のモデルは、この里地自然地域で実現可能であると記している。私は、この3つの理念を、地域内循環、人と人、人と自然の共生、住民参加と位置づけ(テキスト「里地」1998)、持続可能なコミュニティの一つの尺度としてとらえてきた。
一方、新・生物多様性国家戦略(2002)では、生物多様性は、人間を含む生物の拠り所と位置づけ「里地里山自然地域」における生物多様性の保全を警鐘している。ここでの持続可能性の尺度は、身近な生物との共生である。この両者に関わる人材を、ネットワーク化し、活動を展開している。
この関係者は、全国800人(団体)の農林業従事者、市民、NPO、NGO、研究者、大学、メディア、自治体職員等である。

里地ネットワーク

(連絡先) 〒105-0003 東京都港区西新橋2-16-2 3F TEL 03-5404-4846 FAX 03-5404-4847
(インターネット) <http://satochi.net>

Network for Sustainable Rural Communities

(Contact point) 2-16-2, Nishi-Shinbashi, Minatoku, Tokyo, 105-0003, Japan Phone +81-3-5404-4846 Facsimile +81-3-5404-4847
(Web page) <http://satochi.net>